

皆さん、こんにちは。「正信偈」をご一緒に学ばせていただきまして、一回一回の集いの重ねによりまして、だいたい進んで参りました。いま学ばせていただいておりますのは、七高僧の中の第二番目、天親菩薩のところですね。この前は「天親菩薩造論説 帰命無碍光如来」、この一行二句についてでしたが、今日は「依修多羅頭真実 光闡横超大誓願」の一行二句についてと思っています。全体の流れがありますので、十五頁の全部をご一緒に拝読させていただきたいと思います。どうぞ声をお出しくださいませ、お願い致します。

天親菩薩造論説 帰命無碍光如来

天親菩薩は、『浄土論』を著わされてみ仏の心をつぶさに説かれました。

「私は碍（さまた）げなき光の如来に帰命します」と表明され、

依修多羅頭真実 光闡横超大誓願

釈尊の教えに依って真実の帰依処を顕し、
人みなが迷いの生活からただちに目覚めに至る、
大いなる誓願を明らかに説きあらわされました。

広由本願力廻向 為度群生彰一心

み仏の本願の力を広く人々の上に表して、
生き悩む人々を救い遂げるため、
本願に頷（うなず）く一心をあきらかにされました。

どうも有難うございました。こうして皆様方と一緒に親鸞聖人が表されました、根本の聖教であります『教行信証』の中の「正信偈」について聞かせていただくことは、まことに有難いことでもあります。

いつものように、最近思うことを申し上げたいと思うのでありますが。明順寺さんの門のところに出されておりました、報恩講ですね。十一月は京都の真宗本廟のご本山において、二十一日から二十八日まで報恩講が勤まります。親鸞聖人のご生涯の恩徳に謝し、親鸞聖人の教えに生きるということを私たちが表明し、そして自分の生き方そのものを親鸞聖人の御前に、御同朋の方々と共に明らかにしていく。そういう真宗門徒にとっては最も大切な御仏事であります。明順寺様におきましても、来月お勤めになられるようであります。浄土真宗の聞法の道場、寺院で報恩講を勤めることは、大変尊いことであると思っております。

報恩ということですが、本当の人間の生活の豊かさはですね、恩に応える。報恩講は親鸞聖人の御恩、親鸞聖人を通して、仏祖、仏陀釈尊を始めとして、仏道の伝統に深く感謝することによってございます。恩を感ずるということが、私は人間の生活の一番豊かなこととして教えられていると思っております。

現代は物質的な繁栄、文化的な豊かさ。文化と一口にいっても幅が広いわけですが。文化というならば、本当の文化が大事なのであって、人間を飾るような、人間それ自身を本当に見つめることができないのでは、私は本当の人間を豊かにする文化にはならないと思っておりますね。人間を開発することが文化の生命でありましようけれども、仏教は特に、真宗はあらゆる人間の一人

ひとりにおいて、最も根本の大事なことを説明するということでもあります。

先程ご住職様から教えていただいたのですが、世界仏教徒会議というものがあつたようであります。生死の問題を考えるという。そういうことがテーマとして、中心のアメリカの方ですか、問題提起をなされたようであります。

仏教は根本の問題として、生死を超える、生死の迷いを超えるという。いつまでも生きられると思うのは、誤りでありまして、執着であります。これは厳しく先覚の方々が説いておられますように、生死無常であります。

朝には紅顔ありて夕べには白骨となれる身なり

(真宗聖典 八四二頁)

紅顔は紅い顔。血の気の通った顔であっても、夕べには白骨となれる身なりと。大変厳しい、厳しいと言ってもそれが事実なのですね。やっぱり事実程、厳しいことはないと思うのですね。事実は必ず死ぬのでありますけれども、私たちに限ってとってしまうのは迷いですね。生きるということも、まだ大丈夫であろうとってしまう。

そういう点では、私は仏教に教えられますと、私自身は迷いの名人ですと。名人にはね、二つ重なっております。この名人とですね、迷う人の迷人。それだけ執着が深いのであります。「朝には紅顔ありて夕べには白骨となれる身なり」ということは、私も知っておりますし、初めて聞いたときには非常にショックでしたが、しかしそのことを本当に身に受けているかという悲しいかな、忘れておることがあります。自分のこととは思わないということがあります。そういうすぐ忘れるというのが人間である。

そういう人間の偽らざる現実にあるからこそ、聞法、聴聞ということが大事なのですね。忘れなくなるというのが理想でございますが、現実には忘れるという現実がある。だから常に、聴聞に心かけると。お念仏の教えは、忘れても忘れても呼びかけてくださるということにおいて、大変大きな大事な意味があるのであります。

報恩講、御恩を感ずる。仏法の御恩を感ずるということにおいては、私は父母の恩ということも感じていくことができる。もし仏法に遇わなければ、父母の恩がどうしても最優先されるかわからない。仏法に出遇って初めて父母の恩、父母を縁としてこのいのちをいただいたと。このいのちの尊さということを実に教えられるということがあります。御恩を、恩恵を感ずるということが、本当に豊かな人間生活の開かれていく道であると。報恩講の講というのは集いでありまして、その報恩講が最も大切な仏事であると教えられていることは、非常に尊い。本当の文化の豊かさであるといわなければならないのであります。

それからつい最近、十月十四日の新聞で見たのですが、こういう歌が投稿されておりました。

「生き抜く」と言えば疲れる

「生き延びる」ぐらいがちょうどいい

秋の風

京都の森谷さんという方なのですが、これは極めて常識的ですね。生き抜くというとどうしても力むということが伴うかと思えます。生き延びるというのは、いのちをいただいて、御縁の中を生き抜いていくという。そうなるのであれば、暑い夏が終わって秋の風が吹くように、ちょうどいいのだという、人間の常識としては非常にわかる歌だと思うのです。報恩講で言いますと、親鸞聖人が歌われた恩徳讃ですね。

如来大悲の恩徳は

身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も

ほねをくだきても謝すべし

(真宗聖典 五〇五頁)

これはなんと八十五歳のときに歌われて。私も歳を重ねて老人と呼ばれるようになりましたが、老人になると新しい人生が開かれてくる。それは若いときに考えていた想定外のものが開かれてくる。

例えて言えば、金子大栄先生が晩年、一日に二つの講座をするのは疲れると。一日一つにするように心がけておりますと。そういう非常に率直なね、お話がございまして。先生の若いときには、そういうことはなかったのです。私は大学に行っているときに朝昼晩と先生がね、本当に情熱を込めて話される。まるで疲れを知らないような、そういうお姿を拝見しておりますが。歳を取るとね、一日に一つの講演が本当に大事なのだと。それも歳相応でありまして、自然の姿であると思うのです。

師主知識というのは、釈尊を始めとしてよき人々の恩徳。ほねをくだいても、身を粉にしても報ずべし。私この報ずべし、謝すべしという言葉は、しなければならないという命令形ではなくて、せずにはおれないという意味のね。身を粉にしても、ほねをくだきても報ずべし、謝すべしという、もう親鸞聖人の存在自身の内面から、一番奥底から沸き立ってくるようなね、そういう声だと思えます。

私たちがいま親鸞聖人の制作された「正信偈」に触れることができるということも、「正信偈」をいただいて人生が開かれていくと、豊かになっていくということも、親鸞聖人が九十年のご生涯をかけてしてくださったお仕事によるということでもあります。そこには親鸞聖人の教えをいただくならば、人生は常識ではかるようなものではなくて、常識を超えて身に余る、私の考えや計画を超えて、大いなる恩恵をいただくと。そこに報恩講をお迎えする意味があるのであります。

こうして聞法の集いにお参りして聞かせていただくということも、私の予想を超えて、大いなるものをいただくと。いわゆる専門的な言葉でいうならば、まあ特別なことではないですね、人間の本当に大事な根本の問題のことをです、六道流転の人生。

六道流転というのは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天。苦しみや辛いこと、不安や悩み。老いたり悲しんだり、上がったりが下ったり、いろんなことがあります、そういう六道流転の人生が仏法に遇い、本願に遇い、念仏をいただくことにおいて仏となる道を歩む人生。本当に目覚めたものとなる、そういう人生をいただくと。仏弟子としての人生が開かれる。

私たちは帰敬式を受け、あるいは仏門に入ると、釈という字をいただきます。親鸞聖人も愚禿釈親鸞。特に親鸞聖人は、愚かなる身によって、僧にあらざ俗にあらざということを表明されて、本当に世界が開かれているわけです。僧にあらざ俗にあらざ。いわゆる形式的なですね、迷いがありませぬという僧ではない。また、俗に埋没しておる、そういう俗でもない。本当に仏道を生きるという。そういう名のりを愚禿という。

禿(とく)は禿(かむろ)ということで、少し髪の毛が生えているというような姿を表すと聞いていますが。釈の上にわざわざ、僧にあらざ俗にあらざということを名のられて、愚禿釈親鸞と。親鸞という名は、七高僧の天親菩薩の親ですね。鸞は中国の曇鸞大師。その天親菩薩と曇鸞大師の名を受けられて、愚禿釈親鸞と名のられた。名自身が親鸞聖人の生きられるお姿、精神というものが表されておる。曇鸞大師においては、特に本願力回向ということを明らかにされ、天親菩薩は一

心願生ということを明らかにされました。

願生ということは、一心に如来真実のお心に目覚める。一心に浄土に生まれることを願うと。浄土に生まれることを願うということは、本当に生きていのち終わっていくことができる。未来に不安がない。安んじて生き、安んじて死にゆくことができるという。死後の不安が非常に多いということが、人間の現実にはあるわけですがけれども。

いのちが終わるということは、帰っていくのであると。こういう人間観ですね。還帰、帰る。本来の世界へ、色のない、形のない、真如の世界に帰っていく。私はですね、素朴な言葉で申し上げるならば、釈尊の帰られた世界に帰っていくと。親鸞の帰られた世界に帰っていくと。七高僧の帰られた世界に帰っていくと。その教えを生きていかれた私たちの、先立っていかれたご先祖の方々、御同朋御同行の方々、念仏に生きられた方々が帰っていかれた世界へ、私もまた帰っていくことができるのである。そういうことを、それこそ肩肘張らないでね。無理せず、自然体でね、生き切って帰っていくことができるのだなあという、そういう人生が開かれるという大いなる意味があると思います。

二か月経ちまして、この前のときには暑かったのですが、秋になりましてね。聞法の秋ということでございますけれども、季節的にはちょうどいい季節になりました。

前回は、「天親菩薩造論説 帰命無碍光如来」という一行二句について学びました。天親菩薩が、『無量寿経優婆提舍願生偈』という浄土に生まれゆく道を、短い歌にして歌われた。それにおいて、「帰命無碍光如来」という。一切に妨げるものがない、光の如来、阿弥陀のはたらきの世界に帰命し、帰っていくという。これは南無阿弥陀仏ということであって、南無阿弥陀仏はインドの言葉で、南無は帰命、阿弥陀仏は光明無量寿命無量の妨げない、障りない永遠なる仏様であると。丁寧に言えば、帰命尽十方無碍光如来。十字尊号。だから非常にね、道理そのものなのです。道理そのもの。理屈ではないのです。真実の表現なのですね。真実の名のり。それが南無阿弥陀仏なのですね。だから呪文でもおまじないでもないのですよ。真実の法のはたらきそのものですね。

これは例としてあまり適当かどうかわかりませんが、子どものためならいのちを捨ててもいいというお母さんがですね、子どもが危ないとき、子どもの名を呼んで、海に飛び込む。あるいは自動車の前に飛び込むということすらあるわけですね。名というところにはですね、存在、はたらきを表すわけですね。名というのは存在の証のようなものではないですか。

これは忘れられない逸話なのですからけれども、昭和天皇さんが植物学者でしたね。大きな植物園がある方が案内されて、「他のものは無名の草です」と言ったら、昭和天皇さんがね、「無名の草はありません」と。「草にはみんな名があります」と言われてね。その通りだと思うのですよ。発見すれば名付けられるわけでしょ。やっぱり人間にもですね、名が与えられるということは、私は大変な意味だと思うのですね。

やっぱり人間を呼び覚ますということが名として呼びかけられるという。ただ名前だけ呼んでいるのではないのですよ。存在が、存在そのものが名において呼びかけられる。そういう意味を持っていると思いますね。

それから南無阿弥陀仏と名のりとして念仏が表現されておるということは、本当に大きな画期的な意味がある。そういうことを歳と共にね、教えられつつあります。現在進行形。それは歳を取ってきたら、寝たきりになることも有り得るわけですよ。寝たきりにはなりたくないけれども、身の事実としてはないとは言えない。寝たきりになっても念仏すると、念仏の道は閉ざされるどころか、いよいよ開かれてくる。切実な意味をもってはたらきをもって開かれてくるという、そういう意味があると思いますね。男であろうと女であろうとね。

前回は、小林凜さんのことを紹介させていただきました。生まれた時が未熟児で九七六gですか。

いまの時代の中ではとても生きられないような形だったと思うのですが生きられて。いじめられたのだけれども、非常に感性豊かな方で、俳句に生きる力、勇気、そういったものを与えられた。小学校中学校では不登校だったようでありましたけれども、不登校であっても家で俳句を作られ、学習をされて、高校では俳句で知られるようになったと。有名なのは日野原重明さん。また俳人の方とも交流ができて、高等学校では認められて、楽しく高校生活をしておられる、そういう姿がテレビにも映されておりました。

人間にとって認められるか認められないかということは、特に人間社会の中では大きいことでもあります。何故本願かと言えば、私は人間関係の中で認められ、認められなくても、如来様は、阿弥陀はあなたよ、と呼んで、呼び覚まさずにはおかん。その存在の尊さですね。それを呼び覚ます。存在の尊さを呼び覚ます。これが阿弥陀の本願ですね。

人間は悲しいかな、どうしてもとっていいぐらいそこまでききません。役に立つか役に立たないか。自分に良くしてくれるか良くしてくれないか。金儲けがあるかないか。世話をかけるかかけないか。そういうのは人間の持つておる功利性、損得、利害打算。つまりは人間の計らいなのです。計らいというのは観念的などちでもいいことではないのですよ。毎日毎夜二十四時間計らいの中にあるような、そういう根強いものですね。

それを親鸞聖人は本願に遇うことにおいて、自力の計らいに捉われているのではないかと。だから自力の計らいということに気が付くということは、如来のはたらき、本願のはたらきに触れて、自力の計らいであったかと、あると気付くわけですね。気付くと闇が破られる。闇に光が当たると、闇のまま残りません。

素晴らしい言葉があるのですが、大学生のときに講義で聞きました、明来闇去（みょうらいあんこ）、闇去明来（あんこみょうらい）という。あんころもちみたいですけどそうではない。明かり、光来たるならば、闇去る。闇去るならば、光来たる。同時なわけですね。即なわけですね、即時。闇、自分が自分中心の考えで間違っておったと。間違っていたと気が付くのは間違いだと知らしめる光が来ているわけですよ。中々これが容易ではないのですよ。まあ仮に間違っただけをやり、自己閉塞ですね。光来たれば闇が去り、闇が去れば光が来たと。

だから間違っていたという、懺悔（さんげ）ということが大変な意味があります。懺悔（さんげ）はおのずと讃嘆、光に遇うという。だから親鸞聖人に「愚禿悲嘆述懐和讃」で懺悔（さんげ）がね、述べられておる。仏法では懺悔（さんげ）。世間の道徳では懺悔（ざんげ）と言います。懺悔（ざんげ）と懺悔（さんげ）とは質が違います。懺悔（ざんげ）は人間の心で詫げる。こんなに詫げているのがわからんのかと。これが懺悔（ざんげ）ですよ。自分の正当性を言うわけですよ。人間の懺悔（ざんげ）と懺悔（さんげ）と混同してはならないと思いますね。懺悔（ざんげ）は人間の心を中心にするわけですよ。懺悔（さんげ）は如来様の前に自らの至らないこと、有限性をですね、罪悪性をですね、存在自身がですね、何て言いますか。

戦時中ね、戦前、戦中、戦後、物のない時に、お母さんが赤ちゃんにおっぱいをあげる、子どもに食事をあげるたびに、人様のものを取りたくはないけれども、取ったと。盗んだというそういう歴史があることを、私たちは絶対に忘れてはならないと思いますね。闇の売買を禁止しているのですよ。これは新聞にも出ました。大阪のある謹厳な人が、闇をしないということにおいて飢え死にしたと、新聞に出ました。飢え死にしない人がおるということは闇をしておるのです。悲しいですね、人間というのは。

そこに人間の現実の事実があるわけですね。現実の事実。ありのままの姿。そこに本当に教えられるとですね、よくぞ教えてくださったという、そういう師に対する讃嘆。とても自分はそうではなかった、そう有り得ないという懺悔。それはですね、徹底的に自分自身を照らしてくださる。無

意識の底の底までです。無意識の心と。意識していないけれどもね、これは単純なのですよ。

例えば電車に乗っていて沢山の方が乗っていてね、好みに合った綺麗な女性が乗っていると。ついそちらに目が行くと。ことによったら体を触れていくと。無意識に動くわけですよ。人間はそれ程のものですよ。腹減っていてね、店が並んでいてね、好きなお店は匂いが来るとそちらに寄っていくというふうな。人間の意志では、気持ちでは常識では凶れないものがあるのですね、人間には。生きているということは。人間の意識では。私は大丈夫だということぐらい当てにならないものはないです。

やっぱり親鸞様は本当に正直な方ですよ。真正直な方ですよ。それは

さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし

(真宗聖典 六三四頁)

そうなるようなご縁、条件が整うならば、私はどういうことをするかわからない。だからといって好んで悪をするわけではないですよ。別の言葉で言えば厳粛なる事実ですね、人間の。それを本当に明らかにしてくださった。そこに私たちは立って生きていくことができるという意味がございません。

今日は「正信偈」の二行目の二句ですが、「依修多羅顕真実 光闡横超大誓願」。釈尊の教えに依って真実の帰依処を顕し、人みなが迷いの生活からただちに目覚めに至る、大いなる誓願を明らかに説きあらわされましたというふうに現代語訳をさせていただきました。親鸞聖人は「正信偈」の中に

修多羅に依って真実を顕して、横超の大誓願を光闡す。

(真宗聖典 二〇六頁)

特に修多羅に依ってということがそのまま表されているのであります。修多羅というのはスートラですね。これは梵語です。それをそのまま漢字で、音で写したのです。音写と申しますが。こういう言葉が沢山あります。南無阿弥陀仏ということもナマスですね。アミターバ、アミターユス。無量光、無量寿。それを音で写して南無阿弥陀仏。仏というのは仏陀ということですね。仏陀というのは覚者、目覚めたもの。仏陀、あるいは覚者。梵語サンスクリットの言葉に、仏陀に死んだ者という意味はないのですよ。目覚める、目覚めたもの、目覚めたはたらき。それが覚ですね。覚者。だから仏教は本当に目覚めるというところから始まっているわけですね。

修多羅というのはお経ということであって、お経ということはスートラ。スートラというのは線、筋ですね。変わらない。変質をしないで持続していく。そういう真実が変わらないで、変質しないで、いつまでも伝わっていく。それが経の意味なのです。そこにはですね、人間の言葉が時代状況やいろんな条件によって変わると。今日まで戦争を賛美しておった人間が、八月十五日を境にしてあんな悪いことをしてというようにね、まるで変わってしまうと。それによって沢山の先生方が生徒から不信を買ったと。あんなに変わるものなのかというような。

ちょっと生々しいことを申し上げましたが、スートラ、経が生まれるというところには、変わりゆくものの中に変わずあるもの。釈尊の説法によって経として説かれてきたと。そこに大きな光を限りない無限なるいのちを見出していくことができると。そういう感動があるわけですね。

修多羅に依って真実を顕し。この修多羅に依ってということですが。これもね、真実を顕すのが何によって顕されるのか。修多羅に依ってという。私たちはよき人のおおせということを言葉としては親しい言葉として馴染んでおりますけれども、何故よき人のおおせなのか。それは変わらない真実を話してくださって、私に領けるまで、徹底的にお話くださって、そのよき人のおおせを

いただくなれば、迷いの多い、苦難の多い人生を本当に生きていくことができる。生きていのち終わっていくことができる。もっと言えば、中々人生に意味が見出せなかったけれども、この人の教えに遇って、生き様に遇って、ああ人生ってこんなに尊い素晴らしいものであるかということを経験され、感動して自らに与えられた人生を生きて、いのち終わっていくことができる。そういうことがよき人のおおせに遇うという意味でしょ、本当の。自分の都合のいいものだけをつまみ食いするというのはよき人のおおせに遇うことではありません。それはよき人を利用する根性ですね。

何に依るかということは、これは大事な問題でありまして、人生の拠り所。ここでは天親菩薩が『願生偈』を表されたのは、仏陀釈尊の真実の教え、三部経、特に『大無量寿経』によって本願の教えをいただき、一心に願生して生きる道を、念仏の道を教わったというそういうことが含まれておるわけでありまして。

この依るということについて天親菩薩の教えを本当に深くいただかれた中国の曇鸞という方はですね、言葉を厳密にされまして。依るということについて、

「何の所にか依る」、「何の故にか依る」、「云何が依る」、と。「何の所にか依る」は、修多羅に依るなり。「何の故にか依る」は、如来すなわち真実功德の相なるをもつてのゆえに。「云何が依る」は、五念門を修して相応せるがゆえにと。
(真宗聖典 一七〇頁)

何に依るかをまず問われて、それは修多羅に依ると。釈尊の真実の教え、言葉を補えば、出世本懐の教えでしょうね。これ聞かれるとね、きついですよ。あなたはあなたの行動判断を何に依って決めますかと。儲かるか損するか。成功するか失敗するか。そういう概念性に依って決めます。中々真実に依ってと言えないということがね、人間の生活にはあるわけですよ。そして失敗したら相手を恨み、自分を恨み自分のいのちすら殺しかねない。人様のいのちも勿論ね。

現代の時代の中で、生産性のないものは生きる価値がないといって殺してしまえと、実際に殺したという事実がある。思っているけれども、殺しまで至らないというのは凶りなくあるわけでしょう。それ程現代は、物質文明は進んでいるけれども、人間の闇は深い、いよいよ闇の深い時代ではないかというふうに思われてなりません、どうでしょうか。

修多羅に依るという。よき人のおおせに遇い、よき人のおおせに依るという、そういう道があるわけですね。何故依るか。曇鸞大師はそういう問いを出してですね、それは『無量寿経』にはですね、真実の功德。本当に人間生活を豊かにならしめる本願真実の教えが説かれておる。それゆえに依るのであるという、真実功德相。やっぱり真実に依るか、虚仮に依るかで人生は大いに変わってきます。真実に対しては、虚仮。嘘、仮、偽り。これがですね、真実がわからないと嘘や仮ものや偽物に迷わされるのですよ。

偽物にもいろんな偽物がいっぱいありますけどね、オレオレ詐欺ね。オレオレ詐欺も認識不足だと思うのですよ。私のところに電話が来てね。「俺だけど」っていうのですよ。「声が違うね、いつもの声じゃないね」っていったら「風邪引いているのだ」と。「どうした」っていったら、「実はね、いい人ができてね、赤ちゃんが生まれたと。お金を保証しなきゃならない」ということを言ってね、来るわけですよ。まことしやかにね。いま、オレオレ詐欺で誤魔化される人多いですよ。俺は大丈夫だという人はやられているけど。巧みなのですよ。

これはね、真実に対して虚仮ね。嘘とか仮ものとか偽りとかね。レッテルを貼っていないのですよ。あっちじゃない、私が本物だといって振舞うのです。だからそれがね、嘘であり仮ものであり偽りでありということを見通す眼が真実なのです。

だから真実のはたらきというのは、あってもなくてもいいものではないのですよ。なければ、人

間の生活は空しく終わるわけです。仮ものでは。それ程の切迫感、切実さ、真実にはそれがあるのですね。真実に遇わなければ、自分の人生でそれを感じることがなければ、空しく終わるわけですよ。一生、七十年、八十年、一生を生きてきて、今度生まれ変わるときにはお前のような奴とは結婚しないというのではね、悲しいではありませんか。やっぱりそこでは一度の出遇いが一期の出遇いという、そういう意味を見出さずにはおれないのではないですか。

出遇いということも永遠性ですね。永遠性ということは、日常を包んでいるのですよ。一日一日。何故、南無阿弥陀仏か。念仏となって真実のはたらきが私たちに呼びかけてくださる。如来の真実に触れる、遇うという、本当に生きている事実を持っているからなのですね。

それから曇鸞大師は三番目にですね、どのように依るのかということで問いを起こしてですね、『願生偈』の中には一心願生という言葉が説かれております。『無量寿経優婆提舍願生偈』というのは正式な名前なのですが、略して『願生偈』。『願生偈』の前半は偈頌。韻文、歌となって書かれておりまして、後半は長行、散文ですね。『願生偈』の心を散文で。そこでは五念門という。礼拝、讃嘆、作願、観察、回向。阿弥陀を礼拝する。阿弥陀を讃嘆する。阿弥陀の世界に生まれんと願う。阿弥陀仏の浄土を観察する。如来の回向において五念門を教えられる。法そのものの展開なわけですよ。

人間がでっちあげたというのではないのですよ。人間は悲しいかな、人間がでっち上げたものに迷わされるということが非常に多いわけですよ。相手の欲望が盛んに燃えていれば、迷わせやすいわけですよ。欲望の餌をちらつかせて引っ張ればいいのです。そういう人間の根性があるわけですが、そういう人間の根性に妥協せず、そういう問題を徹底的に見つめ、同悲同感してそれを超えていく道ですね。そこに修多羅は真実に依ると。一心、一心は人間の一心ではないのですよ。如来から開かれてくる一心。

これは京都の五条坂で焼き物かなにかをやっていた方の歌なのですが、仕事が仕事をしています。仕事は毎日元気ですということがあるのですね。

「仕事のうた」河井寛次郎（かわいかんじろう）

仕事が仕事をしてゐます
仕事は毎日元気です
出来ない事のない仕事
どんな事でも仕事はします
いやな事でも進んでします
進む事しか知らない仕事
びっくりする程力出す
知らない事のない仕事
きけば何でも教へます
たのめば何でもはたします
仕事の一番すきなのは
くるしむ事がすきなのだ
苦しい事は仕事にまかせ
さあさ吾等はたのしみましよう

仕事をしているのは私でしょう。私が仕事をしていると言いたいだけけれども、もう私という意識すら忘れると。仕事が仕事をしています。仕事三昧ですよ。人間の私がという意識を超えてね。私

は見事な表現だと思いますね。

先程名前を出しました日野原重明さんがテレビの中で、「腹がすいたということを言ったり感じたりするのは、それは集中力がないからですよ」というふうなこともね、ぽろっと言われましたね。確かにそうだなと思いますね。本当に仕事に熱中すれば、昼飯か夕飯か忘れるということがあるのでしょけれども。まあいわゆる煩惱一杯の人間は中々そうはいかないということがあるわけですが。

そういう中でも遊びに熱中するということはあるわけでしょう。私も子どものときね、昼飯食べるのを忘れて海岸で泳いで遊んだ記憶がありますけれども。熱中すればそういう空腹も忘れるということがあるのですが、それは一つの三昧の世界ですね。そういう三昧の世界では、我ということが、瞬間的に忘れられるということがあるわけですね。子どもに惹かれるというところには、通俗的になことと言えば無心に遊んでいる姿。それは多くの場合は、大人は失っているということがあるわけですね。

日常的な例を出しましたがけれども、真実に会うということがどういうふうな姿をとって顕れるかということをしてですね、修多羅に依って真実を顕すという。真実の帰依処と現代語を補いましたが、やっぱり帰依処ということは単なる空間ではないのです。抛り処なのですね。場が開かれるという。空間的な場所ではないのです。存在の場です。これはね、はっきりしているのですよ。具体的なのですよ。どんなに立派な建物、部屋であってもそこに素晴らしい人々がいても、よく来たと、会えて嬉しいのだという人間と人間との触れ合いが、交わりが、交流が、感応が開かれなければ、場となりません。居づらいですね。肩が凝るですね。早く帰って女房の顔が見たいと。

場というのはね、存在の抛り処ですわ。それは真実の場を人間は求めている。仮ものや偽物は剥がれるのですね。また人を傷付けたり、自分も傷付いたりということがありますから、修多羅に依って真実を顕しというこの言葉について、釈尊の教えに依って真実の帰依処を顕しという。その教えをいただいて、人間が本当に帰っていくことができる、生きていくことができる、そういう場が開かれる。

「光闡横超大誓願」。光闡というのは光とありますが、本当に光というのは世界を開くわけですね。闡というのは明らかにそれを表すという。横超の大誓願。この横超の大誓願ということが、横超ということが大変大事な言葉でありまして。横超、横というのは他力を表すのですね。超というのは即時に超えてという。親鸞聖人は非常に厳しく諫められておられまして、横を他力、横さまにということとは他力を表す。弥陀の本願にかける。堅というのは堅さま。人間の自力を表す。それから超に対して出。出というのは漸次段々に良くなっていくとかね、目覚めていくとか。これも時を要するわけですね。即時ではないです。

人間の日常的な意識から言えば、自力のほうがわかるのですよ。努力して煩惱を断って、段々覺りに近付いて、ついに仏さまになったと。これは理屈としてはよくわかるのですよ。理屈としてはね。しかし理屈の通りになるか。誰が、自分が。ここが大事なのですよ。煩惱を断とうとする。腹が減ったら人様のものを欲しがるとするのは煩惱だと思っても、腹が減ると、欲しくて欲しくてたまらない。理屈ではないのですよ、事実なのですね。

だから自力というのはやればできると思っているけれども、事実からくるとそうはならないという。この身の器量では人を一人殺さないと思っても、縁があれば人を殺してしまう。原爆のボタンを押すわけですよ。これが人間ですよ。段々に良くなるというふうに、そうはならない。そこにですね、苦悩を痛むところに本願力、横超という。本願のおみのりがですね、如来の真実が直ちに私の上に表れて、汝、人間よ。あなたは必ず迷いを超えて仏となるべき存在です。人間に生まれたということはなんと大いなることではありませんかと。

そういう教えに遇わなければね、自分の判断でね、消すのですよ。自分だけではない、他人すら消してはばからない。罪悪深重、深い、闇が深い。こういう人間なのですね。だから横超ということは、親鸞聖人が非常に大事にされている。これも『大無量寿経』から教えられている言葉なのですが、大というのは真実の、優れた、多くのということが同時に、微細なる一人の上にも響くという。まさに大誓願ですね。十方の衆生、みなもれず救い遂げようと。そこに救い遂げないものがあるならば、仏とはならないという誓いがあります。

釈尊の教えに依って真実の帰依処を顕し、人みなが迷いの生活からただちに目覚めに至る、大いなる誓願を明らかに説きあらわされましたというふうに現代語訳いたしました。言葉は不十分ではありますが、時間が経ちましたので話のほうは一応これで終わらせていただきまして、後は座談会としてよろしくお願い致します。どうも、ご清聴有難うございました。